

チ 深める ローカル

ひたる アート

交わる ピープル
Wednesday

知る カルチャー

楽しむ スポーツ

役立つ ライフ



小児病棟に入院する患者の兄弟と遊ぶ「しづたね」の清田悠代さん(大阪市都島区の大阪市立総合医療センター)

「ただわく」

約二百床の小児向け病棟を抱える病児の中核医療施設、大阪市立総合医療センター(大阪市都島区)。五月中旬の夕方、小部屋から乗上げな声が聞こえてくる。のぞいてみると、水遊び用の小さなビニール製プールにスノーボード

子どもが病気になる。親の目はどうしてもその子に向く。入院や通院しなければならぬケースではなおさらだ。その際で子どもの兄弟姉妹は親に十分構ってもらえず寂しさやストレスを感じていることも多い。清田悠代さん(31)は見送とされがただった兄弟姉妹を支えるボランティア活動にいそむ。遊んだり話し相手になったり。子どもたちに笑顔が戻るのが何よりの幸せだ。

子どもも患者の兄弟癒やす

「しづたね」代表 清田 悠代さん

清田さんにも心臓病を抱えた四歳連いの弟がいた。母親が献身的に世話する一方、清田さんは中学、高校の帰りに家族の買い物をし、弁当も自分で作った。風邪でどうしようもないときも、母親の隣に寝る弟を起すにはいけないと我慢。でも耐えきれずお母さん、薬ちょうだいと言って弟も目覚めさせてしまったの

と話す。学齡期の兄弟姉妹の支援ボランティア「しづたね」は回センターで月二回、活動を続ける。長期入院の病児相手と異なり、兄弟姉妹対象のボランティアは全国でもわずか。代表の清田さんは「寂しさを和らげる手伝いができれば」と話す。

病児の兄弟姉妹は冒険に訪れても感染予防のため病棟に入れないことも多い。みんな寂しさをくらえている。知らず知らずに自分を抑えているかもしれない。かつて見かけた病棟のロビーで泣きながら母親を待つ二二三歳の女の子の姿が頭をよぎる。こうした子どもたちを支えよう。自らの進む道が決まった。

研究生として大学に残り、米国のシリング(兄弟姉妹)支援の実態を調べた。支援の種類を育てようと、二〇〇三年に大学の先輩ら三人で「しづたね」をスタート。最近は活動に理解を示してくれる医師や看護師、学生、主婦らも増え、メンバーは五人、ボランティアは五十人近くまで膨れ上がった。これも「人との出会い運がよかった弟のおかげ」と信じている。

種は小さくてもやがて大きな実をつけた。子どもへの熱い思いを抱えた清田さんの優しいまなこはまよるも子どもに向いている。

(大阪経済部 長谷川尊)

一緒に遊び、寂しさを和らげ

を悔やんだこともあった。弟思いの姉は大学で社会福祉専攻。しかし三年生と聞き、弟が亡くなった。心に空いた大きな穴。三カ月間、大学に足が向かなかった。ある日、ひどい寒さと関節が痛んだ。母親に伝えると手をさすってくれた。「心の中で劇的な変化があった」。迷惑をかけられないと無意識に背を向けてきた母の養育を「甘えもい」と養育に受け取れた。

ールを浮かべて、小さな男子が大人と一緒にボールすくりに興じていた。男子は大喜び。しばらくして母親が迎えに来ると男子は「また来るね」と元気に帰った。

和らげる手伝いができれば」と話す。